

ねずみ駆除協議会のこれまでを振り返って

元木 貢

アペックス産業株式会社(motoki@apex-sangyo.co.jp)

ねずみ駆除協議会の設立後、すでに半世紀が過ぎた。そこでこれまでの歩みを振り返ってみた。

設立総会

1966 (昭和 41) 年 3 月 15 日

会長に佐々学教授，委員長に成毛彦吉氏を選出。

会報第 1 号発行

1966 (昭和 41) 年 9 月

ねずみの問題は身近でありながら，科学や技術の世界から敬遠され，疎外されている。一握りの技術者や科学者が集まって，ねずみ駆除協議会の活動を始め，このたび「ねずみ情報」の発刊にもふみ切って，知識の交流をめざすようになったことはまことに喜ばしい。(佐々 学)

歴代会長



左から 佐々学
(1966 ~ 2006 年)



田中生男
(2007 ~ 2011 年)



矢部辰男
(2012 年 ~)

歴代副会長



左から 三宅弘文
(1966 ~ 1974)



緒方一喜
(1975 ~ 2006)

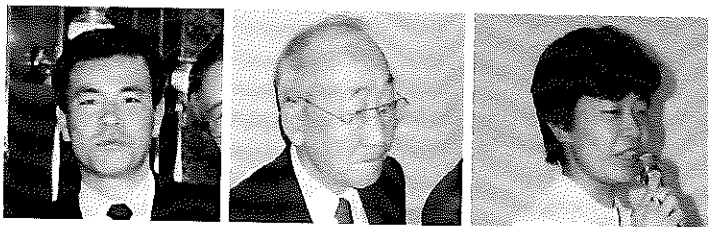


矢部辰男
(2007 ~ 2011)



元木貢
(2012 ~)

事務局



左から田中生男，伊藤靖忠，皆川恵子。

ねずみ供養

成毛製薬は1905（明治38）年に黄燐を水飴で溶いた「猫イラズ」を開発，殺鼠剤の代名詞となった。間もなく殺鼠剤で死んだネズミを供

養するため清明節の日にネズミ供養を始め，本年で114回目となった。ねずみ駆除協議会も毎年参加させていただいている。



長元院 1996（平成8）年

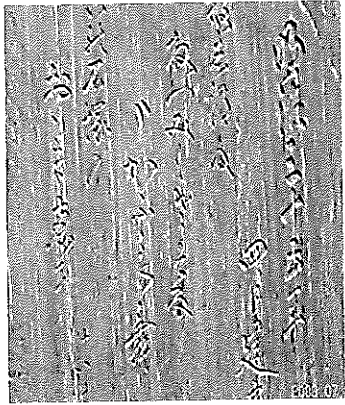
八幡神社 2012（平成24）年



大泉寺 2015（平成27）年

2008（平成20）年，明治32年から始まったペスト流行により，駆除されたネズミの供養碑

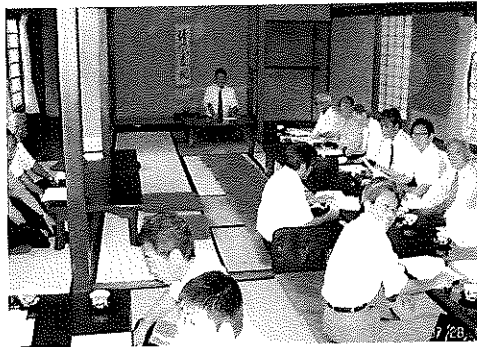
がある麻布の祥雲寺でねずみ供養と総会が開催された。



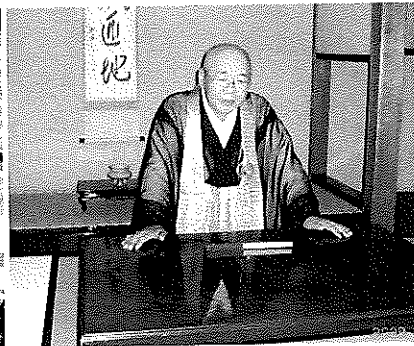
ねずみ供養碑



参加者による記念写真



総会風景



住職による講話

研究会

2月ないし3月に研究会を開催. PCOばかり

でなく行政の方々も年々増加し, 200名を超えるようになった.



2000年



2004年



2008年



2010年

研究会懇親会 (2008年)



田中生男先生の挨拶



長谷川恩先生の乾杯



懇親会風景

懐かしの写真



宇田川竜男先生（1987）

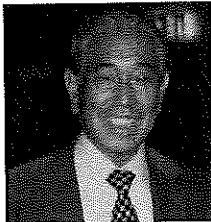


草野忠治先生（2007）

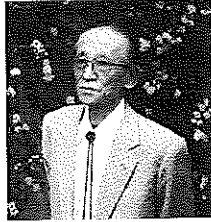


長谷川恩先生（2007）

歴代委員長



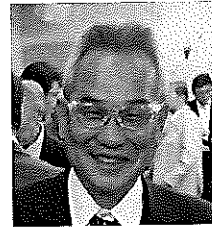
成毛彦吉
1966(昭和41)年
～1972(昭和47)年



池田安之助
1973(昭和48)年
～1981(昭和56)年



元木 貢
1982(昭和57)年
～2008(平成20)年



谷川 力
2009(平成21)年～

会報第1号発行

1966年(昭和41年)9月に会報第1号が発行された。内容は以下のとおり。

「ねずみ情報」の発刊に寄せる

- 1) 新潟県与板保健所管内におけるねずみ駆除体制はどうあるべきか
- 2) ネズミ駆除についての若干の考察
- 3) 流行性出血熱の媒介動物について
- 4) コンテナ輸送と検疫
- 5) 駆チュウ戦略40項
- 6) ネズミの害
- 7) 資料編集方針について

第1回ねずみ研究懇談会

1972(昭和42)年9月1日に日本環境衛生センターにおいて第1回ねずみ研究懇談会が開催された。内容は次の通り。

1. 行政の立場から(横浜市・布施雪夫)
 - ・市町村が実施している全域ねずみ駆除は効果に問題がある
 - ・吏員と地区指導者の意欲・態度・知識
 - ・横浜市ではねずみ生息状況が局地多生化
 - ・ネズミアンケート 生息 38.0%, 餌消失 78.8%
 - ・駆除業者は技術が低い, 効果判定をしない, 使用薬剤にも問題がある

2. 研究機関の立場から (横浜市衛研・大島司郎)
 - ・ 駆除技術を確立する (評価方法が大事)
 - ・ 餌慣らしが必要 (毒餌配布時に無毒餌も添付する)
 - ・ ね協に今後の強力な活躍を期待する (情報交換, 研究分担, 標準的な駆除要領の制定)

第5回研究懇談会

1969 (昭和 44) 年に国立公衆衛生院大講堂において, 厚生省と共催により「鼠族衛生害虫駆除研究協議会」を開催, 250 名が参加した. シンポジウムで「ねずみは根絶できるか」について以下の話題提供と質疑応答が行われた.

1. ネズミ駆除で考えること (東京大学医科学研究所長・ねずみ駆除協議会長 佐々 学)

第1はネズミの生理や生態, 第2はネズミの害や駆除, 第3はネズミの人類に対する役割である. ネズミは重要な実験動物で, スクリーニングで毒性の強い理由で捨てられた化合物の中から殺鼠剤が生まれる.
2. 農村行政の立場から (新潟県子坂保健所 百都保司)
 - 1) ネズミ駆除行政はこれで良いか
必要性をPR, 衛生担当者が少ない, 勤務年数が少ない, 2~3年で配置転換
 - 2) ネズミ駆除体制の確立が必要 民間組織が停滞
 - 3) ネズミ駆除指導のあり方
一斉駆除の習慣化, 市民に駆除意欲を, メーカーの技術指導
 - 4) PCOに期待する
 - 5) 防鼠建築の推進

3. 地区組織指導者の立場から (埼玉県環境衛生推進協議会 大川時次郎)

- 1) 行政と地区組織活動とのパイプ役
- 2) 都市化により地区組織活動が難しくなった
- 3) 住民のNEEDを把握し実践活動する
駆除活動に関心を持たせる
- 4) 環境整備立ち遅れ

地区住民と関係する行政が一体となって総合的な活動が望まれる

- 5) 自発的な駆除活動を育てる
調査したところ, 自発的に駆除をしている人は88% (ハエ・カ50%, ネズミ33%), ネズミが減っていると回答した人は54%

使用殺鼠剤は, 低湿地帯ではクマリン, 高台ではシリロシド・硫酸タリウム, 殺鼠剤を使用した人は40%, 1世帯が200~300円使用していた

4. 都市行政の立場から (東京都衛生局予防部防疫課 安元宗一郎)

- 1) ネズミの分布状況
都内一般住宅で人口1人当たり0.6頭, 繁華街で2~3頭
昭和30年 ドブネズミ58%, クマネズミ41%,
昭和42年 ドブネズミ90.5%, クマネズミ8.6%

- 2) 駆除対策の現状
各区市町村で衛生班の指導で10~3月に一斉駆除を行っている
町会, 自治会, 婦人会, 商店会に指導, 薬剤の一斉配布
ビルでは管理者を指導 千代田区では昭和40年に70%で駆除実施

そのうち PCO に委託は 49%

3) 駆除対策の問題点

行政の横のつながりが無い(環境衛生課・食品衛生課など)

現在、各世帯に既成毒餌の無償配布

殺虫消毒取締条例で届け出のある PCO は 148 社 (1 人 1 社が 64 社, 10 人以上は 14 社)

4) 駆除対策の問題点

- ・縦割り行政
- ・伝染病予防法で吏員の立ち入り権
- ・ビルでは指導から監視へ
- ・PCO の指導育成, 資格認定制度の確立

5) 今後の駆除の考え方

- ・建築基準法に防鼠構造基準を入れる
- ・駆除意欲増進の PR

5. PCO の立場から (PCO 連合会会長 元木三喜男)

- 1) 生態が把握されていない
- 2) RAT CONTROL とは
駆除, 防鼠, 定期検査が必要
- 3) 作業工程が完全に実施されているか
調査 (被害, 証跡, 環境), 薬剤・毒餌・捕鼠器・
接触剤の総合対策, 定期点検

4) 効果的な CONTROL

ネズミの生態を熟知, 駆除技術, 委託者・地域住民の協力が必要

5) 開発が望まれること

高喫食・高殺鼠力・低毒性の殺鼠剤の開発, 不妊剤・忌避剤, 食糧管理による生息局限化と駆除の総合施策

6. 研究者の立場から (植物防疫協会研究所長 三坂和英)

- 1) ネズミは根絶できるか
条件次第, 現状で条件は満足されていない (技術的・行政的・政策的・指導的・実践的など多方面にわたる), 不満足な条件を無くす努力
- 2) 駆除に必要な研究活動
・ネズミのこと, 薬剤の効果
- 3) 縦割り行政
厚生省・農林省に限らず全ての行政に関連する
- 4) ネズミ駆除の考え方
ネズミへの関心を高める
- 5) ネズミに関する情報活動
平時のネズミの生態, ネズミの発生予察など調査活動

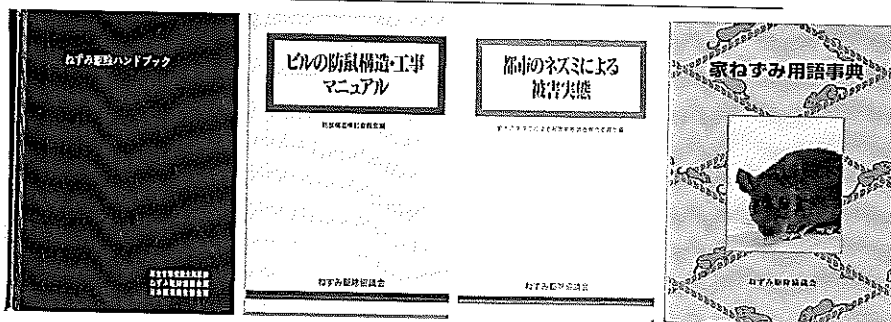
専門委員会

1967 (昭和 42) 年	そ害調査専門委員会・殺そ剤専門委員会
1969 (昭和 44) 年	調査編集委員会・技術委員会・業務委員会
1971 (昭和 46) 年	用語統一委員会
1985 (昭和 60) 年	防鼠構造専門委員会
1990 (平成 2) 年	被害実態調査専門委員会
1993 (平成 5) 年	ねずみ防除史検討専門委員会

1997 (平成 9) 年	防鼠手引書専門委員会
2001 (平成 13) 年	実態調査・用語検討専門委員会
2004 (平成 16) 年	用語検討専門委員会
2006 (平成 18) 年	ホームページ専門委員会
2007 (平成 19) 年	40 年史編集委員会
2008 (平成 20) 年	殺鼠剤問題検討専門委員会
2010 (平成 22) 年	「企画委員会」発足

出版物

1967 (昭和 42) 年	ねずみ駆除ハンドブック ネズミの害事例集・第一集
1974 (昭和 49) 年	ネズミの害事例集・第二集
1990 (平成 2) 年	ビルの防鼠構造・工事マニュアル
1995 (平成 7) 年	都市のネズミによる被害実態 (A5判)
1998 (平成 10) 年	ねずみ駆除の手引き (一般家屋用)
2001 (平成 13) 年	ねずみ駆除の手引き (飲食店用)
2006 (平成 18) 年	家ねずみ用語事典



1. 「ねずみ駆除ハンドブック」
1967 (昭和 42) 年
厚生省環境整備課監修ねずみ駆除協議会編日本
環境衛生協会刊定価 800 円
 - 3 章 防鼠構造にかかわるねずみの生態
 - 4 章 建築物内のネズミの行動実態
 - 5 章 防鼠工事の実際
 - 6 章 防鼠構造・工事基準案
 - 7 章 防鼠に関する法律, 基準
防鼠構造に関する参考文献
2. 「ビルの防鼠構造・工事マニュアル」
A5判 1990 (平成 2) 年
 - 1 章 防鼠構造・工事の歴史
 - 2 章 防鼠構造・工事の基本概念
3. 「都市のネズミによる被害実態」
A5判 1995 (平成 7) 年

4. 「家ねずみ用語事典」

2006 (平成 18) 年 ねずみ用語検討委員会編

5. ねずみ情報 No.48 「特集：日本におけるネズミ防除史」発行

1997 (平成 9) 年

1) 昭和初期までのネズミ防除史

2) ネズミ防除における行政史

(1) 国を中心にした対応

(2) 地方自治体における対応

東京都・大阪府・神奈川県・愛媛県・北海道・

新潟県・神戸市

3) 天敵による防除

4) ネズミ駆除剤

5) ネズミ防除機器

6) ネズミ駆除と業界物語り

7) ねずみ駆除協議会年表



映画・スライド作成

1969 (昭和 44) 年	映画「あなたの町のネズミ作戦」
1974 (昭和 49) 年	ネズミの生態写真 (白黒), 4 枚 1 組の組写真を 4 組作成 カラースライド第 1 編「種類と習性」制作
1978 (昭和 53) 年	カラースライド第 2 編「行動と被害」制作
1979 (昭和 54) 年	カラースライド第 3 編「駆除」制作

生息実態アンケート

1984 (昭和 59) 年	東京都, 大阪府, 福岡県の PCO にアンケート調査実施
1988 (昭和 63) 年	第 1 回「ネズミの生息に関するアンケート調査報告書」発行
2003 (平成 15) 年	第 2 回「ネズミの生息に関するアンケート調査報告書」発行
2013 (平成 25) 年	ねずみ情報 No.67 「特集：ねずみに関するアンケート調査報告書」発行 ねずみ情報 No.68 「資料：ねずみに関する関東地区自治体アンケート調査報告書」発行

川口市におけるネズミ駆除実験実施

1974 (昭和 49) 年

場所：川口市芝一丁目町会

日程：説明会・アンケート配布 10月 29日

駆除実験 1月 14日~20日

報告会 昭和 50年 3月 19日

実験方法

A 地区 シリロシド・クマリン系製剤

B 地区 シリロシド 市が一斉配布の 5 倍量

C 地区 シリロシド 市の配布量と方法による

実験結果

A 地区 配布量 4038, 消失量 224 消失率 5.5%

B 地区 配布量 1273, 消失量 49 消失率 3.8%

C 地区 配布量 403, 消失量 13 消失率 3.2%
まとめ

毒餌消失量は配置量 5714 個に対して 286

個 (消失率 5%) と少なかった。

ネズミの息音が少なかった。

地区組織活動の中で最良の駆除法の検討には十分な資料を得られなかった。

事後のアンケート結果から、地区ぐるみのネズミ駆除が必要と回答した人が 92%あり、一斉駆除の必要性が確認された。

ネズミの研究施設 (通称：ネズミ小屋)

ねずみ駆除協議会は、1971 (昭和 46) 年に東京大学医科学研究所寄生虫研究部の敷地内にネズミの研究施設 (長さ 2.7m, 幅 1.8m, 高さ 3m の部屋を 3つ並べたもの、小さな鉄扉があり、それをあけると隣の室にもネズミが出入できる) を建設、ドブネズミの繁殖の観察を委託した。その結果は、総会で報告されるとともに、佐々学著「熱帯への郷愁」の中に「閉鎖環境におかれたネズミについてのレポート」として収録された。

閉鎖環境におかれたネズミについてのレポート

日 時	観 察 経 過
1971年 6月 5日	ドブネズミの雄 3頭, 雌 1頭放獣
7月	3頭の雄の間に争いがはじまる
9月 1日	子を 7頭産んだが、それは 2, 3日のうちにみんな親に食べられた 1号雄は全身較傷をこうむって死んだ
9月 13日	第 2回の出産, 赤ん坊たちを育てずに、みんな食べてしまった
9月 26日	第 3回の出産, すべて食べられてしまった
10月 22日	第 4回, 11頭出産
11月 22日	3号雄は全身咬症で死亡, 子ネズミはすべて育つ

1972年1月19日

第5回, 8頭出産

子ネズミは強く大きい順に雄親に6月までに殺されていった
一番小さくて弱い, 12号雄が1972年いっぱい生存

雌4頭はみんな1年以上生存して, 1973年の正月を迎えた
雌同士の間にも出産と育児のための巢の確保という目的で, 優劣の
順位がつき, 原則として最上位の雌だけが子を育てられる

1972年10月

最高の55頭にまで個体数が膨張

1973年5月末まで

どの雌ネズミにも出産がみられない,

1974年4月末

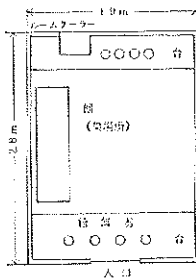
雄同士, 雌同士の闘争の末, 26頭になってしまった

クマネズミの試験

1. 繁殖

1980年3月, ネズミ小屋の一室(2.8 m×1.9 m)をステンレス板で壁を囲いエアコンを設置,

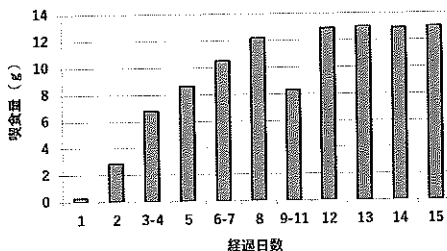
都内大手町のビルよりクマネズミ 6頭を捕獲し放獣した。1年半で27頭に繁殖した。飼育は玉川学園を卒業し当時寄生虫研究部の研究生であった一盛和世氏にお願いした。



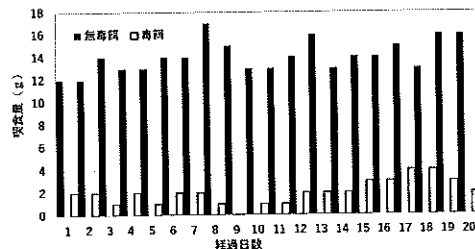
左から平面図, 巢用の棚, 餌と水

2. 餌を交換

飼育に使用していた固形飼料から粉末飼料(いずれも日本クレア製)に変え喫食量を観察したところ, 餌成分が同じで餌の形状がペレットから粉末に変わっただけで数日間は喫食が少なかった(下図は無毒餌喫食試験結果)。

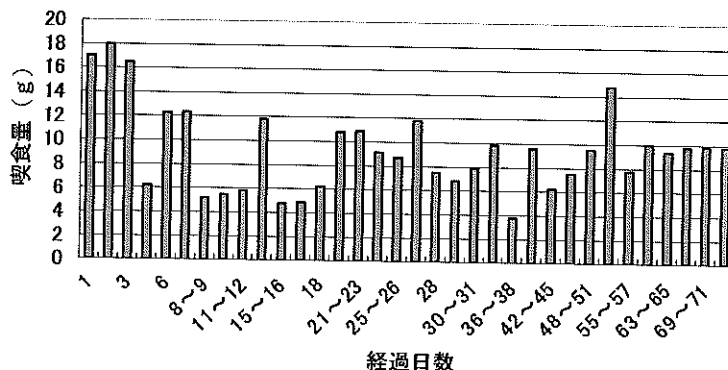


3. 無毒餌と毒餌を併置したところ, 毒餌はほとんど食べなかった(下図)。



4. ワルファリン毒餌と水だけ与えて73日間観察したところ, 27頭のうちに5頭(18.5%)が

生き残った（下図：1頭あたりの平均喫食量）。



以上の結果から、ビルのクマネズミは大変警戒心が強く、クマリン系殺鼠剤に対して抵抗性を獲得していることが明らかとなった。

相談に対する対処

口頭 52.4%，現場へ行く 38.5%，PCO 紹介 9.2%

場所別 一般住宅 56.5%，下水溝 8.0%，飲食店 7.8%，団地 4.5%

衛生動物被害実態調査（1974年）

東京都など12都道府県，名古屋市など3市，配布総数 447，回答率 28.2%

被害種別相談件数

ネズミ 33.0%，蚊 9.4%，ダニ 8.2%，ドクガ 7.5%，ゴキブリ 7.4%，ハエ 7.3%，ナンキンムシ 6.2%，ノミ 1.2%，ユスリカ 1.2%，ヤスデ 0.6%

1 役所当たりの相談数 129 件

生息実態アンケート調査

クマネズミは増加傾向，ドブネズミ，ハツカネズミは減少傾向が見られた。とくにビルにおけるクマネズミは 1988 年の 76.9%から 2003 年，2013 年とも 80%を超え，とくに東京では 94.7%と優占していた。

	建物形態	クマネズミ (%)	ドブネズミ (%)	ハツカネズミ (%)
1988 年	ビル	76.9	45.7	20.7
	住宅	62.8	43.0	31.4
	全体	57.3	59.4	36.2
2003 年	ビル	83.9	37.9	7.5
	住宅	64.0	34.2	27.3

	全体	65.9	40.1	31.4
2013年	ビル	82.4 (東京 94.7)	24.6	3.5
	住宅	61.8	29.3	20.4
	全体	65.2	33.0	24.8

厚生労働省医薬食品局審査管理課へ殺鼠剤の許認可に関する要望書提出（2009年3月）

1. プロ専用薬剤の承認推進をお願いしたいこと。
2. WHOが勧告しているように、新規承認が促進されるよう試験項目を簡素化し、開発コスト及び承認手数料を軽減するようご配慮いただきたいこと。
3. 感染症発生等、緊急時に備えて、行政における備蓄を推進していただきたいこと

ねずみ駆除協議会設立から52年

ねずみ駆除協議会が設立された昭和40年代は市町村の衛生班が地区衛生組織を指導し、ね協の事務局や委員も各地の講習会に招かれ、環境衛生大会は事例報告などで活気に溢れていた。市町村による殺鼠剤配布がなされ、殺鼠剤市場は大きかった。

昭和43年にPCO協会が設立され、ビルは

PCOが防除を担った。そのころからビルにおいてクマネズミが増加し、殺鼠剤の抵抗性も問題となり難防除となった。殺鼠剤が効かないことから粘着トラップが全盛となり、当会の「ビルの防鼠構造・工事マニュアル」が出版され、防鼠工事が急速に普及していった。

伝染病予防法は平成11年（1999年）4月1日に廃止され、行政による殺鼠剤配付やそ昆担当者が激減し、殺鼠剤開発は縮小し、撤退が相次いだ。それを補完するように、建築物衛生法にIPMが導入されると、環境整備の重要性が見直されることとなり、ね協研究会の参加者も増加し、協議会がねずみ駆除業界を先導した役割は大きい。

今後もねずみによる感染症の国内感染が懸念される。殺虫剤・殺鼠剤を医薬品医療機器等法からはずし一元化、使用制限、資格制度が望まれる。

かくて私は草野さんと同期の卒業生に

岩本龍彦

鵬図商事株式会社(iwamoto@hohto.co.jp)

応用動物昆虫学教室には、いつも何人かの内地留学生が居られた。前身が教員養成学校のせいか、理学部など他の学部卒で高校教師をなさってる方が多かったですね。

あるとき、それほどのお歳でもないようなのに、なんか超然とした雰囲気を漂わせた、とつき難いような、話してみればそんなでもないような細面の中年男性が、知らぬ間に研究室に居られたんですよ。聞けば鳥取大学からの国内留学生—と言うんだそう—で、その人が草野さんでした。しかもあちらでは既に助教授職。後に応用動物昆虫学会賞受賞(1963年)に繋がる、クマリン系殺そ剤の毒作用研究の仕上げに来ておられたんですね。抗凝血剤の作用機序の研究で、プロトロンビンタイムをひたすら追っかけてらした。

三坂教室には新規登録予定の農薬サンプルが農薬検査所から届けられ、農取法に従って急性毒性の確認や、アズキノウムシを使う基礎効力の確認などをするようになっていた。この仕事は格好のバイト仕事だったので、貧乏学生たちは大助かり。マウスやラットの急毒試験は、うんざりするほど沢山のネズミとの格闘だった。

できれば誰かに手伝って貰いたい。こんな作業にも草野さんは進んで加わってくれたんです。

最初のうちは、いろいろな実験手技を教わったので、私たちにとって得難い時間になって嬉しかったんです。ところが何をすることも一所懸命なんだよな。手抜き全くなし。助けてくれるのは有難いんだけど、これには我々が参った。

教授の三坂さん、助教授の室賀さん、講師の伊戸さん、教務補佐だった田中(生男)さんに留学生、それと学生が5人。教える側も学生もみんな“さん”付けで呼び合ったから、ジャーナル輪読会や3時のおやつ時などは、さながら家族団らんのような調子でしたな。

そんな折、伊戸さんが「たしか、今のネズミ小屋にお住まいだったんですよね」と三坂さんに訊いた。もう随分と前の話なんだろうが、草野さんは新潟県立加茂農林高校の講師をされた後、東京教育大学の教務員時代に世帯を構えられたのです。

このネズミ小屋かよ。我われ学生が実験用のマウスやラットの飼育ケージを大量に積み上げている、コンクリート土間の平屋である。「初めから変な小屋と思ってたんだ。三和土の中ほど